

こちら無限世界の666部隊

あじぽんぽん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

無限世界は様々な世界の魂が流れ落ちてくる終着点である。

勇者や魔王、天使や悪魔、神や魔神の魂すらも。

六人の管理者が支配し尽きぬ戦いを繰り返すこの大地。

例え元神であろうとインフレした無限世界ではゴブリン以下のちに等しい。

666部隊を率いる彼は癖のある部隊員に悩まされながらも任務を遂行していくのだ。

目次

第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
25	18	12	6	1

第1話

やあ、勇者や、聖女や、神などの新入り転生者諸君。

なに一つも自由のない無限世界へようこそ。

すでに気づいた者もいると思うがここは不条理にあふれたクソの
ような世界だ。

不本意かい？

だが慣れてしまえばクソ溜めでもそれなりだよ。

やることやって管理者の目にとまれば、飼い犬ていどの発言権が与
えられるはずさ。

そんな理不尽を強要するようなやつらには従わないって？

ははっ、分からなくもないが郷に入っては郷に従えだよ。

右に倣えするのが世の常であり、自由で平等な世界つてのも言われ
るほど自由で平等ではなかったりする……今まで好き放題してきた
君達以外の人間においてはね。

そうそう、弱肉強食つてやつだ。

どの世界でも力のあるものがすべてを手にして、弱者を虐げ道理を
押し込めることができる。

それはそうしてきた諸君らのほうが実感できると思うのだがね？

まあ、それでもあえて先輩として一つだけ言わせてもらおうとすれば
だ。

何でもかんでも望み通りになる世界は楽園などではなく、覚めない
悪夢の類だと思うぞ？

◇666部隊の野営地。

「どういふことだ隊長っ!!」

寝起きである。

正確に言うならば今叩き起こされた。

オレの首をつかんで片手でもちあげる女——クロエによって。

彼女の背丈はオレよりわずかに低くオレよりも細身だ。

しかしオレの足は地面からぶらんぶらんと離れている。
勘弁してほしい。

見回すと作戦会議もできる大型テントの中だった。

「……確か、昨日はジャムナ副長と酒飲んでそのまま寝ちまったのか？」

「オレはエスパーじゃないぞ主語をいれてくれ、いったい朝から何なんだクロエ？」

首を絞められても怒りもせず忍耐強く問いかけるオレは立派な上司の鏡だ。

自画自賛？

自分で自分を褒めないと、ここではやっていけないし精神がもたない。

だがそんなささやかな謙遜もこの女には通じない、マジで通じない。

流石は元魔王だというべきか？

「新兵が入ってきたら私に教育をさせてくれると言ったではないか！？
なのになぜ、またキリカのやつがやっているのだっ!？」

クロエは白銀の髪と無駄にでかい乳を揺らしながらオレを揺さぶる。

口をアヒルのように尖らせ、非常に色っぽい表情だ。

中身を知らなければ声かける程度には。

「あゝ、そのことか……」

「ああ、そのことだっ!!」

「とりあえず降ろしてくれ、このままでは窒息して死ぬか骨が折れて死ぬ……ひよつとしてお前、オレ殺したい?」

「え……ああっ!?! す、すまん!?!」

先ほどの勢いが嘘のように静かに地面に下ろされた。

胡坐をかき絞められた首を擦りながらクロエを見あげると、今度は叱られた子犬のような顔をしていた。

「今回のやつらはそっち系だから、お前とは相性悪いと思ってキリカに頼んだ」

「なっ!? そ、そんな理由で納得できるか！ 勇者だろうが神だろうが私にも教育できる!!」

「お前さあ……まえ、聖女とやらが来たときなにした？ 罵られて頭吹き飛ばしちまっただろうが？」

指摘に狼狽を見せるクロエ。

「あ、あれは……あの発情したメス犬が悪いのだ!!」

「それでも、明らかにやりすぎだぞ」

「私を愚弄するだけならまだしも、隊長を籠絡しようとして色目を使ったからだっ!!」

「そんなんでオレが落ちるタマかよ」

オレが溜息をつくくとクロエの切れ長の目が細くなる。

一部のマゾ気質のある野郎なら癖になる表情だな。

「嘘をつくくなっ!! 隊長の性欲は発情期のケダモノ並だと知っているぞっ!!」

「へ？ そりゃオレだって人並みの性欲はもってるが、ケダモノってほどではないだろう？」

「え……だ、だが、わ、私とっ……その、したと……し!!」

クロエはナニかを思い出したのか言葉を詰まらせる。

艶やかな褐色の肌がリングゴのように染まっていく……多分あの件だ。

「あのことは忘れろ、オレも忘れるから……」

「……………」

なんでそこで悲しげな顔をするのかなお前は？

なんなのこの罪悪感……。

「今回の新人はキリカが面倒みる、変更はしない、以上！ それと命令だクロエ、今から適当に二名連れて昼まで哨戒任務にいつてこい」

「な、なんだと……!？」

「朝っぱらから体力が有り余ってるんだろ？ 復唱はどうしたクロエ」

途端にクロエの赤い瞳に怒りが宿り、美貌が激しくゆがむ。

側頭部の角がバチバチと放電している……こ、怖ええ。

「た……ただ今より、適当に、二名連れて、昼まで、哨戒任務にいきます!!」

「おう、いつてらしやい」

ぶるりと震え、彼女は荒々しくテントからでていこうとする。

オレは頭をかきながらその後ろ姿に言葉をかけた。

「あくクロエ。悪魔系のやつが部隊にきたら、お前に全て任せるからそのつもりでな」

「——!!」

クロエは凄いい勢いで振りむく。

現金なやつだな、ガキみたいに嬉しそうなツラしてやがって。

「ふふふ……そうかそうか! やはり隊長はキリカより私のほうを信頼しているのだな! うむ、そのときはいかなる状況でも任務を遂行する、無敵の兵士に育てあげてみせるっ!!」

「ああ、期待しているぞ」

「うむうむ、万事この私に任せろ! では任務にいつてくるっ!!」

この女はコロコロと気分が変わる……ある意味で安上がりだ。

クロエはステップするような足取りでテントの外にでていく。

野戦服に包まれたでかい尻と犬のように振られる細い尻尾を見送りながら、再び溜息をついた。

「はは、慕われていますな隊長殿?」

「なんだよ……起きていたのか、副長殿」

「あれだけ騒がれれば、嫌でも目が覚めるといふものですよ」

オレの横でむくりと起きる見あげるような大男。

赤銅色の肌に筋肉の塊のような肉体。

恐ろしい顔立ちだが、小さな眼鏡を乗せたその表情は非常に穏やかで理知的だ。

後ろに流された黒髪と広い額には尖った二本の角。

彼の種族はオーガである。

「それもそうか。しかし、なんでアイツはあんなにキリカと競おうとするのかね?」

この666部隊の頭脳。

真に信頼できるオレの片腕のジャムナ副長に質問した。

「キリカが原因ではなく、隊長に認めてもらいたいだけでは？」

「オレにいい？ アイツにとつてオレは箸にも棒にも引つかからない存在だったと思うんだがなあ」

クロエとは前世では顔見知り程度の殺しあう関係だった。

まあ、オレは有名人を知っている一般人つてところだ。

なにしろやつは元魔王だし。

「心当たりがなにもないので？」

「この世界に来てから……だったら、あるかな」

「はは、ならば、それが理由でしょう」

明快に笑うジャムナ副長。

オレはともかく、アイツにとつては汚点な出来事だったと思うんだけど？

少なくともオレが逆の立場なら……考えてもきりがないか。

「キリカのところに行ってくる。新兵を搾り過ぎてないか確認しておかなきゃいかん」

「では、自分は本部との定時連絡をしておきますか」

「おう、任せたぞ」

手を振ってテントの外にでる。

見あげた太陽はいつもより大きかった。

草原地帯だが今日は砂漠化するかねえ。

オレはうんざりしながら野戦服の襟元をひろげた。

ここは無^{マイノリテイ}限世界。

正常者を気取るのは簡単だが実行するのは思いのほかしんどいものだ。

第2話

野営地にはいくつもの大型テントが張られている。

その中の一つに小柄な姿が見えた。

キリカがいるテントの入り口には、いつも彼が立っているのですねにわかる。

「よう、ゴブ郎さん、良い朝だな」

「ごぶつ（ああ、バターになっちまいそうなほど良い朝だ、隊長）」
空を見上げる。

朝日という名の太陽はやはりカンカンに照っていた。

そんなジョークを言う兵士はゴブリンである。

武人のたたずまいだが野戦服を着た姿は間違いなくゴブリン。

この世界のゴブリンはべらぼうに強く、舐めかかって殺される転生者をよく見る。

オレもここに来た当初は殺されそうになった。

とはいえ慣れてくればしよせんはゴブリンだ。

まずは因果消滅兵器を用意して、それから刺し違える気で背後から不意打ちを仕掛ければ、一人でも何とか倒すことは可能だ……凄いいミラクルが起きればだけど。

だがゴブ郎さんはそんなゴブリンたちとは違う。

スペックが明らかにゴブリンのそれではないのだ。

例えるならばゴブリンの皮を被ったスーパーサイヤ人。

666部隊の中で最強の兵士を一人あげると言われれば、まず最初にでてくるのは間違いなくゴブ郎さんだろう。

「新人たちの様子を見にきたんだけど、どうなってる?」

「ごぶつ（いつも通りだ。ただ今回は自称性神とかがいたので、キリカが大分ハッスルしてそうだが）」

「まじかよ……壊してないだろうな?」

「ごぶつ（フフツ、それこそ管理者にでも聞いてくれ）」

ゴブ郎さんは渋みのあるゴブ顔で男くさい笑みを浮かべた。

唐突だが、オレはゴブ郎さんに敬意を抱いている。

それは彼がただ強い男だからではない。

ニヒルでくさい台詞を口にしてもまったく違和感がないからだ。

線の細い若造にはだせぬ男くさいタフさというべきか……左手がサイコガンの男といい勝負ができると思う。

ゴブ郎さんの言葉を心のメモにしつかりと記入してテントに入った。

途端に鼻についたのは凄まじい異臭である。

「うへ、こいつはひでえなあ……」

想像以上だった。

テントの中は死屍累々な地獄絵図と化していたのだ。

様々な肌色が見える。

男女関係なく全員が裸で例外なく下半身がドロドロになっていた。

今回の新人は勇者とか聖女とか神様とかそっち系の連中である。

この手のやつらは自分こそが主人公的な思考の者が多く、またそういう生き方をしてきたので主役を必要としない666部隊では非常にトラブルを起こしやすい。

特にハーレム系の連中は逆ハーもいれて、部隊の異性に無意識でコナかけようとしてオークに掘られるのだ。

うん、まったく意味がわからない？

まんまの意味。

この世界のオークはアニヤル専だから。

発情すればそれに反応したうちの部隊のオークたちが行列をなして掘にくる。

彼らは弱者と見れば男だろうが女だろうが容赦なくケツを掘る。

掘ること自体がコミュニケーションとでも言わんばかり掘る。

美醜関係なくひたすらに掘る。

オレもここにきたばかりの頃は掘られそうになった。

あるいは彼ら流のマウンテング方法なのかもしれない。

優しい世界で育った連中は打たれ弱く、掘られてすぐ再起不能になったのでは話にならない。

それを防ぐために、だらしない下半身を調教する指導を最初に行

うのだが。

……その結果がこれだよ。

数十人の姿形だけはやたらと整った美しい男女が折り重なって倒れていた。

中央では悲鳴をあげ悶絶の表情を浮かべる男だか女だかよく分からないやつと、その股間に取りつく細い背中と小さなお尻の持ち主が見えた。

背の中ほどまである艶やかな黒髪は先端で綺麗にそろえられている。

スポンと音がしたので見てみれば、男女のアレが哀れなほどシナシナになっていた。

ひでえ……ヘタすりや再起不能、運が良くてもしばらくは使い物にならないな。

「おう、隊長か、ちょうど今、終わったところじゃよ」

「おいおい、キリカ、やりすぎだぞ？」

「ハーレムで百人種つけしたとか、逆ハーで百人はべらせたとか、国一つを孕ませたとか、そんな豪語する連中ばかりだったので期待して少し本気をだしてみればこの有様、てんでお話にもならなかったわい」
カカツ、と笑うキリカもやはり全裸だが恥らう様子はない。

黒髪と雪肌の艶やかなコントラスト。

小柄な体は緩やかな曲線なのになぜか性的である。

一見は清楚だが中身は淫乱。

その顔立ちは美人よりも幼さの目立つ可愛さ。

しかし深い知性を湛えた金色の瞳が見た目通りの年齢ではないことを示していた。

どこことなく我が故郷の和を感じさせる容姿だ。

「使えそうなのやつはいたか？」

キリカに好き放題、ただ乱交させていたわけではない。

彼女の能力は術者寄りで端的に言う魔法使い、対象の資質を探ることもできる。

「うーん、使えそうなのは正直分からん。面白そうなのは二、三人つて

ところかのう？」

「今回は不作だな……で、そつちで転がっている男女は？」

キリカが子泣き爺のように取りついて搾っていたやつだ。

「ああ、あやつは駄目じゃな。性神とほぎいておったが、わしを前戯で満足させることすらできん。種は有り余ってそうだから牧場送りが順当じゃろうて」

機械に固定されて死ぬまで強制繁殖か。

一度見せられたあの光景を思い出して怖気がはしった。

あそこでオレたちの今の体が作られたのだとしても、とても許容できものではない。

ああはなりたくないものだよ……南無阿弥陀仏。

「ま、この先の訓練でワンチャンあるかもだけど？」

「ないない、性根ばかりはどうにもならん」

「知ってるかキリカ？ 根性って、意外と育てられるものなんだぜ？」

和風美少女に鼻で笑われた。

死んでる奴はいないか周りを眺めていたら、キリカがオレにツツつと近寄ってきた。

こう、ネコ科の肉食獣を連想させるような動きで。

なんだと思っで見下ろすと。

「そんなことより隊長様よ。これからわしと一発どうかえ？」

しようと誘われた。

オレの体にびったりと身を寄せるキリカには乱交の残滓はまったく感じられない。

不思議なことに不快な性臭もなく、それどころか甘い花の香りがあった。

男ならばすぐにでも押し倒したくなる色気だがオレは断固として拒否をする。

「お前は、オレを、殺す気か？」

「なにを戯れごとを、クロエとは一晩中、体が溶けあうほどに愛し合ったというではないか？」

なっ!?

あのやろう、キリカに話しやがったのか!?

驚いて視線を下げると、にやにやとネコのように笑っているキリカ。

……クロエのやつ、売り言葉に買い言葉でポロつと言ったんだな。

「あ、あれは、お互いの素性を知らなかったから、そうなったんだよ……」

しどろもどろ……少なくとも俺は知らなかった。

でも、クロエは知っていた。

泥沼だよ……ああ、ちくしょう、もうこれ以上は話さないぞ。

「ふくん、クロエはそうは思ってたなさそうじゃが……まあ、どうでもよいか。こやつらには手と口しか使ってたからお腹が疼いてのう。なあなあ、しつぱりぬっぱり楽しまぬか?」

オレの胸に寄りかかり、のの字を書く中学生風美少女。

その上目使いは恐ろしいくらいのおざとさだった。

おいおい、お嬢ちゃん、オレのご子をさするのは遠慮してくれ。

「ノーセンキュウ! 今日は予定があるので隊長としてへたれるわけにやいかんのですよ!!」

ぽいっとキリカを投げ捨てた。

彼女は自称性神とやらの顔の上に尻からポヨンつと乗っかる。

しかし悲鳴はあがらない。

「なんじゃなんじゃ、隊長様はつれないのう。初めての女にはもつとサービスするもんじゃやて? ま、よい、ゴブ郎に満足させてもらうか。これほど滾っていると、鎮めんことには周囲にも悪い影響がでるからの」

「……ゴブ郎さんも今日は予定あるから、ほどほどにな?」

「ほいほい、わかっておるよ」

顔面騎乗したまま足を組み、キリカは目を細めて艶のある仕草で唇をペロリと舐めた。

……だめそうだな。

オレはテントからでるとゴブ郎さんの肩を叩いてその場を後にした。

「いいぞう！ いいぞうゴブ郎っ！ おぬしはさいこうじや
ああああああ!!」

「ぶ う う う う う う う う う う
うううううううううううううううううう!!」

しばらくすると、甲高い肉食獣の叫び声とゴブ郎さんの悲鳴が聞こえてきた……ナム。

世の中、下手な恥をかきたくなければ大言壮語は言わないに限る。
能ある鷹は爪を隠し、優れたゴブリンも一物を隠すものだから。

第3話

666部隊の武器庫に向かうことにした。

積んであった木箱からリングゴを手に入れ、朝飯がわりに齧りながら歩く。

その途中こちらに向かって走って来る、まるまると太ったオークの集団が視界にはいった。

やべえ、緊急事態だ!?

オレはリングゴを投げ捨てケツを押しえながらテントの影に素早く飛びこんだ。

しかし、オークどもはオレのことなんて見えてないかのように走り去っていく。

連中の顔はどれも目を血走らせ、口から涎を吹きだした凄まじく必死の形相であった。

野営地に不吉な風が吹く。

肌が焼けるようなカンカンの日差しなのに感じたのは、いつになく酷い寒気だ。

オレの背後……振り向くとテントとテントの間に黒いボロ切れをまとった人影がいた。

フードの奥は闇になって確認できず、目の位置には幽鬼じみた二つの光が妖しく輝き、手には血のこびりついた大きな草刈り両手鎌を携えている。

ゆらゆらと浮遊しながらオレの横を通りすぎ、オークどもを追いかけっていく。

朝の挨拶かわりにサムズアップするその指は骨のみで構成されていた。

「料理長は朝から元気だなあ」

今日のお昼ご飯は……見送って眩くとオレは歩きだした。

武器庫に到着した。

テントが建ち並ぶ中で唯一存在する、コンクリート造りの建物のド

アを開けた。

この666部隊で使われている武器は基本的に管理局から支給されているものだ。

生命エネルギー変換と因果消滅弾の二種のカートリッジだが、弾の製造や個人の特性に合わせた武装の開発は部隊内で出来るようになってる。

その開発担当者が武器庫の責任者でもあるエルフのメルファだ。

広い部屋には木箱や壁に立てかけてある武器が見える。

他にも様々な物資が積まれていた。

隣の部屋に足を踏みいれ、大型工作機械などが設置されている作業場を抜けて奥に進んだ。

「ん、ほらあ、何してはるん？ もっと気合い入れて、お腰に力入れて？」

聞こえてきたのは関西弁を思わせるような女の話し言葉だった。

でも、どこか雅さも感じさせる流暢で優しい口調は京都弁だろうか。

「そうそう、流石は男の子やわく頑張ればできるなあ」

声と共に何かを機械的なリズムで叩きつける乾いた音がする。

メルファはクラフトマイスターだ。

様々な者がメルファに弟子入りを望み、わざわざこんな辺鄙な場所まで訪ねてくるが、匠な彼女が弟子に望む条件は非常に厳しい。

彼女の部屋に入ると審査に合格した弟子とメルファがいた。

ベッドの上にあおむけに寝かされた男の子と、またがるメルファの姿があった。

「ああん、また、いつてまう？ 男の子やん？ ほら、もう少しがんばって」

エルフのメルファは啞え込んで、男の子の上でリズムカルに動いていた。

メルファに弟子入りする条件。

それは彼女の性癖を満たす……シヨタであることだ。

「よう、メルファ、朝からお盛んだな？」

「あら、隊長はん、おはよう。もう、そないな時間やった？」

合体したまま動きを止め雅な微笑みを浮かべて挨拶するメルファ。オレの故郷なら案件モノのオネシヨタな行為を見られても、悪びれる様子は微塵もない。

絹のような金の髪と長い耳、エルフ特有の透き通る美貌をもつメルファは、目を×にして喘ぐシヨタに思いつきり腰を叩きつけたのだ。

シヨタ君は恥ずかしそうにオレに挨拶して、服を抱えて小走り部屋からでていく。

ふふ、いいね、実に初々しい。

この部隊にいると性行為以外にまともな娯楽がなく、どいつもこいつも恥じらい無くパンパンやつてるもんだから慣れちまうが、実際にはシヨタ君の態度が正常だよな。

オレ？

管理者レムナに呼びだされ、管理都市に行ったときに処理するようになっているよ。

まあ、クロエとは……そんときに手違いでちよつとね。

そんなシヨタ君は部隊にいるオークに掘られないのか不安になる見えた目である。

しかし彼は無限世界生まれの人間で転生者よりも確実に強い。

オレの腕を枯れ木のようにへし折って、引っこ抜くことなどは恐らく朝飯まえだろう。

ほんと、^{オレたち}転生者ってなんで生かされているのかと毎度疑問に思うね。

「メルファ、頼んでおいた試作弾のほうはできたか？」

「ばつちりどす、取り敢えず試射用にくつか作っておきました」

細い裸体に白衣だけという、微妙にエロさを感じさせない格好で答えるメルファ。

ん……人によつてはストライク？

まあそうね、オレは欲情しない。

だがパンツは履いてくれというか人前で足をぱかつて開いて、股を

タオルでゴシゴシするのは止めなさい田舎のババアか。

「はい、これがその弾。まだ薬莖はつけてへんさかい、試射はこれできれやす」

メルファは股間にタオルを挟み込むと、棚から弾とスリングショットを取りだしてテーブルの上に置いた。

スリングショットとはY字型の投石機、ようするに子供の玩具のパチンコだ。

弾の特性を見るだけなら火薬は必要もなく、これだけで十分である。

「一発、いくらくらいになった？」

「霊資源……パン一個分くらいどす」

「通常弾の十倍か、結構高いな」

「そりゃ、特注やさかいね」

通常の因果弾は日本円にすると大体十円くらいのコストだ。

「それじゃ試射場使わせてもらおうぞ」

「はいな、せやけど因果弾の強化なんて、そないにコボルトに負けたのが悔しかったんどすか？」

「……たとえ無意味で馬鹿だとわかっていても、大和男児として譲れないモノがあるんですよ」

何度も言うがこの世界のゴブリンは強い。

体格的にはゴブリンと大差ない、犬頭のコボルトも滅茶苦茶に強い。

先日オレは荒野を散歩中に野生のコボルトに遭遇し、手と足の骨を折られて心臓を抉られた。

特に何かした心当たりはない。

ただ怨敵、野生のゴブリンと勘違いして背後から強襲したら返り討ちにあっただけだ。

犬の癖に菜食主義者な奴はオレを食うこともなく、額に肉って書いて放置しやがった。

横で見えていたジャムナ副長とクロエの「あくあく」といった感じの顔が忘れられない。

そんなお茶目なオレの発言にメルファは微笑んだ。

「いやどすなあ、あほにしてるのちゃうて、流星は勇者やと感心してるんどすえ」

口に手をあて、おしとやかな仕草で笑うメルファ。

だが中身はやはり淫乱。

しかしキリエと違って嫌味をまったく感じさせないのは、彼女の人物徳ってやつなんだろうか？

「オレは勇者なんて上等なものじゃない、おまけの残りカスがいいところだよ」

謙遜しているわけでも自虐しているわけでもない。

実際に前世でのオレの立ち位置はそんな感じだ。

「うふふ、なら、隊長はんが皆に慕われ一目置かれるのは、その飾らへん人柄のせいどすなあ」

「えー、そうかなあ？」

またメルファにコロコロと笑われた。

そんな話をしていたときである。

——キュイン。

微かな音、オレたちは同時に反応して顔を見合わせた。

空気が一瞬で張り詰める。

部屋の外からこちらにむけて、攻撃魔法が発動するのを感知したからだ。

オレはメルファの薄い胸の中に抱きしめられて庇われた。

……普通は逆だろ？

いいえ、恥かしながら後方支援担当のメルファ女史のほうがオレより遥かに丈夫なんで……。

爆発が起きる、部屋の外壁が大きく破壊された。

メルファの白衣がはためいたが爆風の熱まではこなかったようだ。カラカラというコンクリの？がれ落ちる音。

立ちのぼる煙の中、穴の開いた壁から現れたのは恐ろしく美しい女だった。

鬼気迫る表情をして、なぜか全裸で、なぜかガニ股で、なぜかひど

く汚れていた。

あれ、確か彼女は昨日入隊したばかりの新人の子だったかな？

ということはキリカの新人歓迎パーティのあとというわけか……
ご愁傷さま。

「お前がっ!! お前のせいで、わたくしはああああああああ!!」

その女神のような美貌をもつ女に睨まれ絶叫して吠えられた。

思わずメルファの顔を見つめてしまう。

キョトンとしたメルファは『いや、うちは知りまへんよ』と慌てて手を左右に振る。

「スズキタカシ!! お前のせいでわたくしの世界は!! お前だけは絶対に許さないいいいい!!」

ヒステリックな女さんに名指しされた……え、オ、オレえ!?

666部隊の隊長なんて恨みを買うことの多い商売である。

卒業生から危険物を送られてくることなんてしょっちゅうだ。

しかし、生まれ変わったばかりの転生者相手だどがまったく心当たりなかった。

今度はオレがメルファに見つめられる。

キョトンとしたオレは『いや、わても知りまへんで』と慌てて手を振り返したのだ。

因果応報とは前世で犯した罪を来世で償うことらしい。

しかし、心当たりのないそれは無自覚に犯した罪なのか、だとすれば神よ救いたまえ。

第4話

オレとメルファ。

二人して手を振りあうアホなことをしていたら、女が修羅の形相になつて両手をかざした。

「死ねええええええ!! スズキタカシいいいいいい!! 死んでわたくしとわたくしの世界に詫びろおおおおお!!」

絶叫とともに女の手の中で急速に集まる魔力。

数秒で完成したそれは光輝く魔力の玉だった。

構築するまでの術式構成の速度と緻密さは見事と言える。

恐らくは下手な核兵器なんて鼻で笑える威力のはずだ。

小国程度なら一瞬で焦土と化せる、まさに神のみがもてる力であった。

それを手に持った女が嘲るように口角をつりあげる。

前世のオレなら微笑んで膝をつき目をつぶって辞世の句を読んでいただろう。

しかしまあ、今となつては……と言ふべきなんだろうか？

「強度二くらい？ 丁度ええどすな、アレで試射実験してみましようか？」

「ああ、うん、頼む」

メルファの気負いもない問いかけにオレは気の抜けた返事をした。

そしてメルファは「えいつ!」と特殊因果弾をパチンコで打ち出した。

こうなんというのか、子供の遊びにつきあうオカンの感じで。

適当に打った特殊因果弾はあらゆる方向へと飛んでいき、次に直角の強引な軌道で女が作り出した光の玉に当たり前のように直撃する。

プシュ……。

風船の空気が抜ける情けない音がした。

因果消滅弾——因果を消滅させるその効果により、始まりをなかつたことにされた光の玉は結果も消されて呆気なく消滅してしまった。

ホーミング機能つきの特殊因果弾一個のお値段は日本円に換算す

ると百円である。

国一つを滅ぼせる魔力の塊は、たったワンコインでかき消えたのだ。

「え、ええっ!?!」

絶対の自信があつたのだろう、女は驚きで目を白黒とさせた。

ブンツ——。

その美しい顔が次の瞬間には轟音と共に爆散した。

悲鳴をあげる間もなく、首から上が跡形もなく消失したのである。

破断面は焼け焦げ、全裸の死体は血も噴きでずに崩れ落ちる。

その背後に小柄な影。

手にもつ獲物は……犯人はどうやら大型鈍器を使用したようだ。

感心するくらいに気持ちのいいフルスイングであつたと言つておこう。

「あらら、事情聴取をする予定が……」

「大丈夫ですか、お師匠様っ!?!」

猟奇死体を作りだしたのは爆音に気づいて駆けつけたシヨタ君であつた。

ひ弱そうな彼は凶器となつた身の丈を越す重量級のハンマーを片手で担いでいた。

シヨタ君の愛の力?

ノンノン、無限世界の人間なら子供でもこの程度はできますさあ。

「メルファ、あと任せちゃっていいかな? この女の尋問含めてアレ

コレさ」

「はいはい、構いまへんよ」

シヨタ君の頭を撫で、イチヤコラしだしたメルファに後始末を頼むことにした。

見下ろした女の体は首元からぶよぶよと肉が湧きだして再生を始めていた。

その光景は正直グロイ……。

溜息と共に教訓をひとつだ……オレたち転生者はそう簡単には死ねない。

管理者が死んでもいいよ、と、許可するまでは永遠に生かされ続けるのだ。

特殊因果弾の試射を終え、野営地に異常がないかブラブラしていたらお昼になっていた。

オークの数がだいぶ減って、時折凄まじい女の悲鳴が聞こえてきたが詮無きことよ。

昼飯のメニューは生姜焼き定食と豚汁、そして大皿に山盛りで積まれた豚ソーセージである。

うん、豚肉だよ間違いないかね？

それにしても料理長の腕は相変わらず最高だ……食材さえ気にしなければ。

食堂は混雑している。

座る席は特に決められていないが、ほとんど指定席みたいなものだ。

オレの左隣にはクロエが必ず座る。

その反対の席にはジャムナ副長が座り、さらにメルファとシヨタ君にゴブ郎さんがいた。

キリカは来ていない、今は満足してぐっすりと寝ているらしい。

そう語るゴブ郎さんは、どれほどの地獄をみたのか蠟人形のように顔色が悪かった。

「つまりあの女は、私たちが元いた世界を守護している女神だったということだ」

「隊長とクロエに関わりある女神ですか……何やら因縁じみたものを感じますな？」

女神ね……。

世界、世界と叫んでいたが、やっぱり恨まれる心当たりなんて欠片もない。

勇者やハーレムメンバーならともかく、オレなんて女神の神託すら授かっただけじゃないぞ？

クロエはオレたちに聞かせながら、お箸を子供のように逆手で握っ

て生姜焼きを突いている。

ぶるぶると震える手が危なっかしい。

わざわざオレに合わせなくても、慣れないなら他の連中みたいにフオーク使えばいいのに。

話しを戻すが、クロエは哨戒任務中にオレの危機を犬のように察知し戻ってきたという。

そしてメルファから事情を聞くと凄いい勢いで女の尋問をしだしたらしい。

尋問……いや、拷問だったんじゃないのか？

オレはクロエの女用の野戦服——ミニスカから伸びる褐色の太ももとロングブーツに、赤いモノが大量についていることに気がついてしまった。

「見た瞬間にやつの素性には気づいた。詳しく吐かせてみると、これがまた呆れたものでな」

「ええ、あら横で聞いてて、他人事ながら隊長はんに同情しましたよ」「うん？ いったい何があったんだよ？」

オレの質問にクロエは箸をもったまま腕組みをする。

「あの周辺世界の神々から選ばれた本物の勇者は隊長だったんだ」「……へ？」

「そう、私が見込んだ通り、隊長はやはり只者ではなかった!!」

頬を染めるクロエ。

うむうむと頷き、なぜか得意気な表情だ。

只者って……勇者なんて無限世界にや、そこらじゅうにあふれているだろうか？

「それを……それをだ！ あの淫売女神が隊長の容姿が好みではないという理由だけで、神々の決定を捻じ曲げ、新たに召喚した自分好みの男に勇者の力を全て与えたのだっ!!」

クロエは山盛りの豚ソーセージに箸を突き刺した。

薄皮が破れ、肉汁がテーブルに飛ぶ。

それをフキンで拭く、女子力の高そうなシヨタ君をクロエ以外の全員で何となく見ていた。

「その結果が勇者もどきの限りない欲望の暴走だ。私を殺したあとに魔の者も滅ぼし尽くしてN A I S E Iとやらをしたらしく、多くの大地が荒廃し光と闇の生命バランスが崩れ、世界を維持できずに消滅したらしい」

「お、おう……オレたちが死んだあとに、そんな酷いことになってたんだ？」

あの勇者、んな面倒なことしてたのかよ。

……オレなら綺麗な嫁さん貰ってさっさと田舎に引つ込むぞい。しかしまあ、魔力主体の世界は思いのほかガワが脆いとはいえ、オレの平凡な顔が切っかけで崩壊したとは……くだらなすぎて涙がでそう。

「あの女は魔王と勇者の世界を継続させるための誇りある戦いを己の淫欲で汚した。とうぜん他の神々の怒りに触れてこの無限世界に落とされたのだ」

「それでオレを恨んで襲撃したのかあ……あのさ、オレ、別に悪くなくね？」

それが事実だとしたら踏んだり蹴ったりだよ。

魔王^{クローエ}を倒したあと、美味しい思いをする前に裏切られて殺されてるし、それまでは勇者は元より他の現地住民にも小間使い扱いで散々こき使われたのよ？

あれ、何だか今と変わりない気がする……？

「ああ、逆恨みもいいところだっ!!」

クローエは牙の生えた歯でバリバリと太いソーセージを千切りむさぼった。

肉汁が飛ぶ飛ぶ……。

話していてよほどお冠になったらしく角が放電しだした。

黙って聞いていたジャムナ副長が呆れた顔で口を開く。

「隊長殿は実にテンプレな過去をおもちのようで」

「言うなよ副長殿……恥ずかしくて自決したくなるからさ」

若気の至りに似た心境だよ、もう。

「……なにより私が気に入らないのはっ!!」

クロエが両手でパンツパンツとテーブルを叩いた。

ま、まだ何かあるのかよ？

「あの淫売のゴミ虫ごみむしのときが、ろくに知りもしない隊長を罵っていたことだ!! うぬぼれもはなはだしく実に不愉快である!! やつは万死に値する!! 第一にだなあ、私を差し置いて許可なく隊長のことを語ろうなどと十万年早いわけで……」

演説を続けるクロエを横目に何があったのかとメルファとシヨタ君を見る。

メルファはおかしげな、シヨタ君は気まずげで恥ずかしげな顔をした。

「おいおい、そういう思わせぶりな態度はやめて本当に何があったんだよ!？」

「女……ラーヴァ・アスクの処分はどうしますか隊長？ 施設のほうに送り返しますか？」

普通の軍隊ならば反逆罪で牢屋送りにして、それから軍法会議だがここでは違う。

弁護士を雇うどころか人権など考慮されず即処断が可能である。

隊という形式だが組織としては実にいい加減で、あらゆることがオレに一存リサイクルされているのだ。

にしても施設か……どうしようかね。

今さら前世の拘りもないし、オレ個人としては、おとなしくしてくれるなら不問でいいんだけど。

考えていたらゴブ郎さんと目が合った。

しばらく見つめ合うと、彼は胸ポケットから一枚のコインを取りだしオレの方へ弾いた。

「うん？ なんだいゴブ郎さん？」

空中でコインを受け取る。

ゴブ郎さんは豚汁を人間よりさまになっている風情で啜った。

「ごぶっ(運試)した隊長、迷っているならそいつで決めればいい。人生なんてどう転んでも大差ないもんさ)」

「……………パネツ」

ゴブ郎さんの男らしい人生哲学に感動した。

オレは指を開いてコインを確認する。

淫売女神ことラーヴァ・アスク……666部隊への残留が決まったのである。

袖振り合うも多生の縁であるのなら殺しあうのもまた一つの縁なり。

悪縁、奇縁と様々あれど、とりあえずはリスペクトしたいゴブ郎さん。

第5話

666部隊とは兵士の育成、ならびに育成方法を模索するための実験部隊だ。

転生者の教育なども行おうが普段は兵士の訓練などが主な任務である。

そんな部隊の隊長に転生者のオレが就いていることは非常に不可解だが、それになんだかんだと従ってくれる隊員たちの心の内も不可解なものだ。

まあ、どんな理不尽な命令であろうと、慈悲深きレムナに逆らえる奴はいないと思うけどネ。

無限世界で、六人の管理者に服従するのは酸素を吸うレベルでの常識。

なので、それ絡みでトラブル起こすのは外からやって来た転生者だけだ。

無限世界しじくに落とされるような奴らに賢人の精神性などは期待できず、何事も話し合いではなく腕力で解決してきたような連中となればやることは決まっていた。

つまり革命という名の反逆である。

しかし、管理局の兵士と転生者の間には天と地ほどの力の差が——サ○ヤ人と戦闘力5の地球人ほどの開きがあり、ましてや主役補正のご都合主義なんて存在しない実に公平な世界だ。

彼らが例外なく得意としてきた交渉術という名の一方的な暴力は通じない。

そのように無知な反逆者たちの未来がどうなるかなんて語るまでもない。

オレがここに来たときもそんな事件が起きた。

というか、同期の転生勇者様たちがクーデターを企んで誘われた。生前は散々な死に方をしたオレは勇者というネームだけで拒絶。

また過去の経験から他人のために何かするなんて真つ平ごめんだと、人間不信の中二病真つ只中だったので話に乗らなかつた。

じゃなかったら参加してたかもしれない、その程度の軽いノリだったよ。

前世はそれで何とかやっていけたんだよ……オレも彼らもさ。

反乱はわずか数十分で鎮圧され、危うくオレも一緒に処分されそうになった。

協力しないが口外もしない、頼むから巻き込んでくれるな……というあやふやなスタンスで報告もなかったオレは、管理局からすれば反逆者スレスレといったところか。

オレが管理者、そして管理局に逆らうことだけは絶対にしないと誓ったのは、翌日に連れていかれた転生体製造施設……牧場と呼ばれる設備を見せられたからだ。

昔バイトで行ったことのある食品工場にも似たクリーンで広い部屋。

そこには、オレの肩ほどの高さがある箱型の機械が無数に並べられ置かれていた。

箱の中に電池のように取り付けられていたのは、体毛をすべて剃られ、肉体の機能をほとんど削ぎ落された勇者や聖女や神……転生者たちの成れの果てだった。

自殺は許されず、男も女も機械で無理やり腰を揺さぶられ生殖行動を強要されていた。

気がふれたような笑い声や呻き声をあげる妊婦たちがベルトコンベアの上で出産し、運ばれる過程で加工され高速成長して、オレたち転生者の体となる魂のない顔無しの赤子たち……。

人どころか生き物としての尊厳すらなかった……オレはその場で胃の中身を全部もどした。

地獄絵図という言葉ですら生ぬるい、今でも夢で見るくらいトラウマものだった。

自分が本当に危ない立場で運が良かったと実感できたのは、同期だった連中の末路を見たとき。

彼らは設置前らしく、作業台に乗せられ箱に収まるようにカットされていく最中だった。

オレがいることに気づくと「裏切者!」「貴様のせいだ!」「呪つてやる!」そう泣き叫びながら口々に罵ってきた。

オレ関係ないし、やんちゃしたお前らの自業自得だろうが……と、返す気力もなかった。

吐きすぎて、気分が悪かった。

そのエログロ体験のすぐあとに女を買える店にいったのは……特殊な性癖があったわけではなく、どうしようもない恐怖で性欲だけが狂いそうなほどに高まっていたからなんだ。

誰かに慰めてほしい、心が女の柔肌と匂いを強く欲していた。

そこに風呂桶一式もって出てきた褐色肌の風俗嬢が……クロエだったわけで。

相手にとつて不足なところか、前世では勇者に総取りされて触れることすらできなかった極上美人の登場に、オレはろくに挨拶もせず興奮のまま豊かな胸に飛び込んで押し倒した。

ああ、元魔王と最後まで致してしまった……しかも延長して一晚貸し切りでき。

クールな美人さんが、可愛らしい顔を見せながら掠れた声で「もつとして」と耳元で懇願してきたらギンギンにもなるだろ?

え、命のやり取りをした相手なのに気づかなかったのかつて?

うん……だって前世の奴は、プラモデルみたいに筋入った四角い筋肉をもつ二メートルを超える大男だったから。

シュ○ちゃんのような角ばったゴリラ顔にツノやトゲを生やしたモヒカンの化け物だったん。

髪と目の色以外は共通点なんてまったくなかったよ……ちくしよ

う。クロエが666部隊に配属されてから聞いたのだが、奴は管理者に逆らい女の肉体に変えられて風俗送りになっていたらしい。

オレが行ったお店は、反抗的だけど面白い資質があつて、使い捨てにするには勿体ない転生者などをメス堕ちするまで躡けるTS専門の風俗店だった。

この無限世界は狂ってる……オレは再会した奴に抱きつかれ股間をさすられ怖くて泣いた。

ちなみに、クロエを完全に服従メスオチさせたのはオレの手柄だと、慈悲深い人から直々にお礼の連絡があった……祝報で。

もう、ぐうの音もでねえよ……。

◇ゴブリンの住処前の平原

とまあ、オレは昔の体験談を集まっている新入り転生者たちに話した。

野営地の外、これから初訓練となるゴ布林狩りをする注意事項のついでにだ。

もちろん、恥ずかしいプライベートの部分には触れずに警告として語っている。

反応は半々。

中には不敵な態度で笑っているやつもいるが別に問題ない。

仮にこいつらの誰かがここにいる間に事件を起こしても、いつものことで処分されるだけだ。

管理者レムナは慈悲深く平等。

行動の代価は自分の命と尊厳なんだから慎重になる必要がある。

頭に自信がないなら、思考を捨てロボットのよう^にに命令に従うのが無難だ。

無限世界ではオレたち転生者なんてアリンコ以下のゴミ屑同然なのだから。

「ん、どうした隊長？ 私の顔などじっと見て……ははんっ、さては惚れたか？」

冗談な雰囲気でないながら、そうあって欲しいと本音がうかがえるクロエは色々と残念だ。

でも、防寒コートからのぞく褐色の太腿には一瞥する価値はあると思う。

空を見上げるとシンシンと降っている。

干ばつするような晴れの日かと思いきや突然降りだした……大雪が。

先ほどクロエは、オレの話に一々頷きながら転生者たちの足を折って周っていた。

倒れて雪に埋まる転生者たち。

彼女の判断基準でオレの話を聞く態度じゃなかった奴の足をローキックでヘシ折ってた。

というか全員の足を折ってたから、クロエがそういう気分なだけだったのかもしれない。

その中にはオレを殺しそうな目で見ている例の女神もいたが、足を折ったのがクロエだと気づいた途端に「お姉さまっ！」と嬉しそうな声をあげ継りついていた。

クロエに殴られ血反吐を吐きながらも、うつとりとしたメスの顔をしていたのは気のせいだと思いたい。

「ああ、口に昼飯のソースがついてるぞ」

ついてないが何となく。

クロエは頬を染めると慌てて後ろを向き、ゴシゴシと口を拭って小さな手鏡を取り出した。

乙女なのかガサツなのか判断に苦しむ。

転生者たちのほうを見ると、七式兵装の魔術式ライフルを各自が受け取り、ゴブ郎さんから使い方のレクチャーを受けているところだった。

ゴブリンを狩りに来て、ゴブリンのゴブ朗さんが指導しているのは中々にシユール。

オレと同じこと感じたのか、なんとも微妙な顔した転生者がちらほらいる。

野生のゴブリンとゴブ朗さんでは、世紀末モヒカンとケン○ロウくらの違いがあると思えばおかしくはないんだけどネ。

段取りも済んだようだ。

オレは雪降る中、彼らの前に立つとゴブリンの住処である巣穴を指差した。

「では、諸君らの初任務だ。あのゴブリンの群れを遠慮なく殲滅してこい」

オレの命令のもと三十人ほどの転生者たちがライフル片手に走っていく。

とてもとても、やる気のない様子でノタノタと。

気持ちは分かるよ、オレもここに来た当初は同じような感じだったから。

三十秒後、新人転生者たちは全滅し初訓練は終了した。

愚者は経験から学び、賢者は歴史から学ぶという。

しかし転生者は死んでも直らない。